

# 「マグダラのマリアとは何者か？」

## ～西洋絵画に見る、その成立と役割～

京都大学大学院  
人間・環境学研究科

岡田 温司 教授

1954 年生まれ。京都大学大学院修了。専門は西洋美術史。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科教授。『マグダラのマリア』『キリストの身体』など著書多数。

本講義の主人公「マグダラのマリア」は、キリスト教ではとても重要な人物で、西欧社会で最も有名な女性の 1 人と言っていいでしょう。実在したことは確かです。新約聖書のなかにも彼女の姿は描かれています。しかしながら、実はどんな人だったのかはほとんどわかっていません。いまに伝わる彼女の生涯も、つくられたものだった、といえます。「罪深い女だったが、回心して聖女となった」のは嘘だったのか？ なぜ、そんな間違っただイメージが広まったのか？ そこにはローマ教皇などキリスト教団が大きくかかわっていたことがわかってきました。絵画を通して、京都大学の岡田温司先生がそれらの謎に迫ります。

- Chapter1 聖書の中のマグダラのマリア
- Chapter2 作られるマグダラのマリア像
- Chapter3 マグダラのマリアと西洋社会
- Chapter4 マグダラのマリアと芸術

## **Chapter1 聖書の中のマグダラのマリア**

最初に、そもそも「マグダラのマリア」とはどのような女性なのかを見ていきます。新約聖書の4つの福音書、それもキリストの死という極めて重要な場面に登場する人物。聖書以外の文書では、「キリストと特別な関係にあった」という記述もあります。しかし、女性の役割をめぐる教団内の葛藤などが原因で脚色を加えられ、まったく異なったイメージに変えられていったのでした。

## **Chapter2 作られるマグダラのマリア像**

第1章で見たように、聖書の記述といまに伝わる「マグダラのマリア」像との間には、ずいぶん大きな違いがあります。では、誰がこのような“改ざん”を行ったのでしょうか。“犯人”は、6世紀のローマ教皇・大グレゴリウス（グレゴリウス1世）。彼は、聖書のなかに登場する別の女性と「マグダラのマリア」が同一人物である、と解釈しました。こうして「罪深い女」「敬虔と官能をあわせもつ女性」といったイメージがつくられていったのです。

## **Chapter3 マグダラのマリアと西洋社会**

それにしても、キリスト教社会はなぜこれほどまで、「マグダラのマリア」のイメージにこだわってきたのでしょうか？ こだわったというよりもむしろ、「マグダラのマリア」のイメージを西欧社会やキリスト教団が利用した、というのが正解のようです。たとえば、「マグダラのマリア」は“悔い改めの模範”とされていきます。一方で、彼女の存在は、不幸な境遇にある女性たちの心の救済といった意味合いも込められていきました。娼婦にとって「マグダラのマリア」は守護聖女となっていたのです。

## **Chapter4 マグダラのマリアと芸術**

最終章では、「マグダラのマリア」と芸術の世界との関係を見ていくことにしましょう。13世紀から今日まで、さまざまな芸術に（作られたイメージの）「マグダラのマリア」はインスピレーションを与えてきました。また、ルネサンス以降、「マグダラのマリア」を描いた絵画は「信仰の対象」から「鑑賞の対象」ともなっていきます。さらに、小説や演劇、近年では映画にも「マグダラのマリア」的な女性が登場。彼女はまさに、西洋の人々の想像力のなかに脈々と生き続けているわけです。